

一、『土砂降りの誕生日』パースデー

0

2003年。

それは、

少し前の話になるのだが

1

六月六日。

それがわたしの誕生日。

世間じゃ、『悪魔の誕生日』などと言われているが、残念ながらわたしは六時に生まれていないし、実家が神社だしで関係ない。

家族でケーキを囲み、みんなで笑い合う。

そんな、平凡な誕生日。

あと、三日後。

とつても待ちきれない。

わたしこと、結真ゆまな 零那は二十才までのカウントダウンにはしゃいでいた。

二十才。

選挙権が手に入る。

大人。

・・・いい響き。

顔がにやけてるのが、よく分かる。

子供っぽいかもしれないけど、何才になっても誕生日はいいものだ。

「ってかさ、二十才になっても誕生日楽しみにしてる人ってさ、日本じゃアンタぐらいなんじゃない？」

学食でいつも通り日替わりAランチを食べながら、智恵ちえが言う。

「うっさいわねー。みんな本当は楽しみにしてるけど、恥ずかしくて言えないだけよ」

「・・・絶対、そうじゃないと思う。でもさ、誕生日のどこがいいわけ？ 年取るだけ

じゃん。また一步、オバサンに近付くだけよ？」

「プレゼントがもらえるから」

「現金な奴ね」

ほっとけ。

とにかく、わたしはこういうプレゼントを貰うイベントが好きなのだ。

クリスマスとか。

「でもま、一応誕生日おめでとう」

「あと三日後だけだね」

わたしは笑いながら言う。

ふと、わたしは学食の窓を見やる。
空は雲一つ無い快晴。
六月なのに太陽が真夏のように眩しい。
わたしの一番好きな空だ。

「ただいまー。あれ、なんで姉ちゃんいるの？」

零那はがらりと玄関の引き戸を開け、目の前にいた彼女の姉に尋ねる。

背は零那の頭一つほど大きい。

黒絹のような真つ直ぐな黒髪を腰まで伸ばし、上品な白いブラウスに黒いロングスカート。

細い切れ目はじろりと零那を見下ろしていた。

「・・・先ほどの零那の言葉を不快に感じてるらしい。

「いちゃいけないわけ？」

「別にそういうわけじゃないけどさ」

「ならいいじゃない。今日の授業、ダルかったから午後全カットしたのよ」

「これまた、昨今の大学生らしいことを。授業料、無駄じゃない」

「うるさいわね。一浪のくせに」

「ほっとけ」

零那は引き戸をがらりと閉め、靴を脱ぐ。

「零那・・・」

自室に向かうため階段を上がろうとする零那を呼び止める。

「ん？」

「父さんが呼んでるわ。あなたの『力』のことだね」

自宅から少し離れたところにある小さな道場。

そこは神社という神聖な場所に似合わず、無骨な武家屋敷を連想させた。

零那は最近急に重くなった引き戸をがらりと開ける。

「ああ、零那おかえり」

袴姿の零那の父親が出迎えた。

手には竹刀。道場の隅には脱いだばかりの防具が佇んでいる。

鏡の扉が半分開いているところから察するに、どうやら先ほどまで鏡稽古をしていたらしい。

流派はない。

強いて言うなれば、一家相伝とでも呼ぶべきだろうが、別にそんな偉いモノではない。

ただ単純に護身術として発達したものである。

「詠理^{えいり}から伝言は聞いたかい？」

「でなきゃ、来ないわよ」

「そりゃあそうだ。零那は武術が嫌いだものな」

言って、父は豪快に笑つ。

「そついうのは姉ちゃんの得意分野。わたしは平和主義なの」

零那の姉、結真。詠理は剣道の達人である。

高校時代は剣道部に入学しており、数々の功績を母校にもたらした。

彼女のいた時代、剣道部は無敗の成績をたたき出していたので、今でも母校へ行くと後輩達に救世主扱いされる。

しかし、同じ高校に通い、熱心に帰宅部に専念していた零那にとってはがさつな姉にしか見えない。

「だが、結界師としての『力』は詠理はおるか、私をも凌駕する。ここまでの力を持つ者は私の祖父ぐらいのものだ」

「でも、お祖父ちゃん、狂って死んじゃったんでしょ？わたしの生まれる前に」

「まあ・・・そうなんだが」

父は気まずそうに呟くと、竹刀を壁に立てかける。

「人を超える力は人を狂わす。それも、神をも殺す力なら当然のことだ」

「何、それ？」

「いや、何でもない」

父は零那から目をそらし、懷から数枚札を取り出した。

「さあ、やってみなさい」

「へいへい」

零那は父から札を受け取ると、それを中に放つ。

数種類の印を組み、手を触れずに札を自在に操る。

札一枚一枚から強い力が迸り、周囲に立方体の空間を生み出した。

「どう？」

「ダメ。ほら」

途端、宙に浮かぶ札が燦り、立方体は跡形もなく消え去った。

「結界は持続しなければ意味がない。注意をそらしたからと言って、結界が解かれるようじゃ、まだまだだ」

「うう」

「しかし、この空間断絶はまだ無理でも、空間遮断は札の補助なしに使うことが出来る。始めてから一年経たぬというのに凄いものだ」

「地味なのじゃダメなのよ。やつぱりカメハメ破みたいな派手なヤツじゃなきゃ」

「流石に著作権法に引っかかるからカメハメ破は無理だが、派手なのはないことはない」

言うや、父は立てかけた竹刀を宙に放つ。

「壊」

短い、しかし力の込められた言葉。

その言葉と共に、差し出された手から溢れ出る凄まじい力が宙に放った竹刀へと向けられる。

鈍い音と共に、竹刀が、ねじ曲がる。

「すご・・・。これ、本当に結界なの？」

「ああそうだ」

ねじ曲がった竹刀を拾い上げ、父は言う。

「結界は外界から空間を遮断し、敵からの攻撃を防ぐ防壁だけではない。『界』を『結』するの名の通り、空間を操作し、時には空間をねじ曲げ、時には空間を湾曲させ、敵を殺めることも、瞬時に移動することもできる。それに」

父は僅かばかり間を置き、口を開く。

「新たな世界を生み出すことも、既存の世界を滅ぼすことも出来る」

「嘘でしょ？」

「本当だ。結界はそれだけ強力な魔術なんだよ」

「へー」

零那は燃え残った札をしげしげと眺めながら呟く。

「だから、暴走を防ぐために術を安定させなければならない。もう一度だ」

「めんどくさー」

刹那、零那の頭にねじ曲がった竹刀が飛んだ。

2

わたしは自室に戻ると、汗だくの上着と下着を脱ぐ。

タンスから適当なシャツとスラックスを引っ張り出し、それに着替え、鏡の前でヘアゴムをとり、ツイントールを解いた。

わたしの髪。

肩まで伸びた、薄茶色い、栗色の髪。

生まれつきこの色のおかげで、昔から色々苦労してきた。

学校で生活指導の教師に何か言われたことは一度や二度ではない。

男子にからかわれたことも一度や二度ではない。

だが、正直こんなのはどうでもいいことの類に入る。

一番困ること。

神社に生まれたのに、この髪のおかげで巫女のバイトが出来ない。

これだ。

これが非常に困る。

世間の大きな神社はどうか知らないが、うちの小さな貧乏神社は長い黒髪でなければ巫女になることが出来ないことになっている。

それはたとえ娘だとしても例外は認められず、わたしは生まれてこの方巫女なんぞやったことがない。

故にわたしは、近所のマクドナルドでバイトしなければならなくなってしまった。

神社の娘が、マクドナルドでバイト。

滑稽なことだ。

実際、バイト仲間からネタとして使われている。

・・・実に不本意だ。

それでもわたしが髪を黒く染めないのは、意外とはた迷惑なこの髪を結構気に入っているからだ。

染めたわけでない、

天然の、

本物の、

薄い、栗色のこの髪が。

本当は髪を括らず、腰まで伸ばしたいのだが、そうなると姉とかぶるのでやりたくない。ただどロングヘアに憧れてるので、こんな中途半端な髪型になったというわけだ。

・・・気がつくと、わたしはじつと鏡を見つめていた。そこにはわたししかない。

当たり前だ。

だけど、わたしは鏡を見る度に、別の誰かがわたしの眼前にいるような錯覚に陥る。

鏡に映る、不気味で、無機質な、貌。

冷笑を浮かべ、わたしを見下すように見つめる、貌。

これが、わたしの貌

わたしの力が強くなる程、鏡の中の貌は不気味に、無機質に、冷酷に、なる。

人を人と思わぬ殺人鬼のような、

能面を被った役者のような、

貌。

怖い。

寒気がする。

嫌だ。

逃げたい。

見たくない。

こんな

そんなわたしを見つめ、鏡の中のわたしはこう告げる。

「あなたは、人間じゃあ、ない」

何故か口元だけ笑みを浮かべ、

瞳はどこか哀れみをたたえ、

「人形よ」

と

「零那、醤油とって」

「うい」

夕食時。神社の家の夕食と言っても他の家の夕食と何の代わりもない。

テレビにはバラエティ番組が映り、父は新聞を広げ静かに唸る。

今日のメニューは鮪の刺身にマカロニサラダ、鶏の唐揚げ、アサリの味噌汁に主食はご飯。

零那の家には母親がいない。

彼女を産んですぐに亡くなった為だ。

それ故に食事は彼女の姉が全て作っている。

零那も手伝えばいいのだが、そんな無謀なことをやらせる者はここには一人もいない。

彼女はとにかく料理という行為が苦手だ。

いや、苦手などというレベルで収まるような可愛いものじゃない。

よく、ゲームやマンガに出てくるドジな女の子は砂糖と塩を間違えるレベルだが、彼女の場合、砂糖と劇薬を間違える。

いや、料理を劇物に変えるのを得意と言った方が正しい。

それぐらい零那に料理を作らせることは危険なことなのだ。

「せめてカップ麺ぐらい作れないの？」

「うっさいわね。そんなに出来るわよ」

「そうね。まさかたかがお湯を沸かすだけで家丸ごと火事にしかける娘なんて、この世界中どこを探しても存在しないわよね」

「うぐ……」

零那は思わず鮪をつまんだ箸を止める。

「あ……あれはね……ちよっとコンロが暴れて」

「うちのコンロはいつ九十九神^{つくもがみ}になったのよ」

「それは姉ちゃんが酷使するから」

「あア？」

「………戯れ言が過ぎました。お許しくださいお姉様」

「分かればよろしい」

詠理は静かにいうと、味噌汁をすすする。

テレビではいつの間にかバラエティ番組が終わり、ニュースが流れていた。

また、どこかの県で殺人事件があったらしい。

現場からアナウンサーが重苦しい口調で事件の内容を伝えていた。

「最近多いね、こういう事件」

「また根暗なクソガキやオタクが起こしたんじゃないでしょうね。ああいう馬鹿がいるから、頭の悪いマスメディアによって、オタクやマニアが犯罪予備軍に、マンガやゲームが犯罪者養成装置のように扱われるのよ。本当に迷惑よ、まったく」

ちなみに、詠理は大学にて掛け持ちで漫研に所属している。

「我が家に来たら、真っ先にブチ殺してやるわ。自分の刀が血で汚れるのが嫌だから、木刀でね」

「それじゃあ、姉ちゃんが殺人者になっちゃうよ」

「なるわけないわ。逆に感謝状が贈られるわよ」

「また滅茶苦茶言ってる……」

「……だが、戸締まりなど気をつけておいた方が良いな」

先ほどまで広げていた新聞を折りたたみ、父は口を開く。

「こんな貧乏神社、誰が強盗に入るのよ」

「万が一の用心だ。強盗はともかく、空き巣に入られても厄介だからな。うちは普通の

家ではない。通帳や貴重品が盗まれるならまだいいが、もし、『こちら側』の品物を一品でも盗まれてもしたら大事だ」

「……………確かにそうね。札一枚、宝剣一振りでも『日常の住人』に渡れば大変なことになるわ……………」

詠理は箸を置き、声のトーンを少し下げた。

「それに、万が一が起る可能性もある。奴らがいつ仕掛けてくるか分からないからな」

「奴ら？」

「いや、何でもない。気にするな」

父は手を伸ばしテレビのリモコンを取ると、チャンネルを変える。

ニュースから一転して、旅番組が画面に映し出される。

有名俳優が初夏の行楽地へと一足先に出かけ、当地の名物に舌鼓を打つ。

有名俳優も、その料理を出した宿の主人も笑っている。

朗らかなナレーション。

ゆつたりとしたBGM。

楽しい一時を切り取り、

それをそのまま額縁に飾ったような、

そんな番組。

誰も傷つかないし、

誰も傷つけない。

そんな、

平和な、

実に平和な番組だった。

血の香が辺りに香る。

壊れかけた外灯の光りを浴び、かすかな光を帯びる紅い湖。

その湖に無数に睡蓮のごとく浮かぶ、

妖しくも狂おしい、

深紅に咲き誇る死の華

3

「え……………何だつて？」

「だから、猟奇殺人事件。あったのよ、昨日この大学の近くで。来るとき気付かなかった？ パトカーとかマスコミの車とか沢山いたのに」

「さあ……………裏門から入ったから気付かなかったのかな」

零那は首を傾げ、紙袋から肉まんを取り出しかぶりつく。

ここは大学の端にある小さな芝生だった。

畳八畳ほどの芝生の真ん中に小さな桜の木が生えており、それが程良い木陰を作ってく

れているので、なかなか快適な空間になっている。
何でも、この桜は何かの記念に植えられたものらしいのだが、今は何の記念かを記したプレートすらなくなっており、分からない。

この場所は部室棟や講堂などで丁度塞がれたような状態になっており、一見すると気付かない。

それ故に零那と智恵のちょっとした秘密の場所となっていた。

「そんな訳ないでしょう。かなり騒々しかったのよ」

「うゝ。じゃあ何でだろ？」

「またアンタ、食べながら歩いてたでしょ」

「あ、それだ」

ほんと手を叩き、納得したように頷く。

「まったく、これだから全てを食らうものは・・・」

「その称号はやめい」

零那は露骨に嫌そうな顔をして、三個目の肉まんを口に運ぶ。

先の称号は、零那が高校時代、修学旅行にてクラスメイトに与えられた称号だった。

修学旅行二日目の夕食。

こういった学生のイベントに付き物のバイキングにて、零那は全ての料理を制覇したのだった。

それも、ただちよつとずつ食べたのではなく、五十品以上あった料理をちゃんと一人分ずつ食べての快挙だ。

しかも、その後部屋に戻って夜食と称し、カップ麺を平らげるなどという人外的な愚業までおとしたのだから恐ろしい。

そんなことをしても、全く体重に変化がないという極めつけ。

それ故にクラスメイト達は畏怖と敬意を表し、彼女に一つの名を与えた。

塵まで食らう少女　ジャンク・イーター、と

零那はそれをかなり嫌がり、その言葉を口にした者を例外なくぶちのめしていたが、まあ、自分で招いた種なのであんまり同情の余地はない。

「しっかしさ、ちよつと意外よね。こんな片田舎で猟奇殺人事件なんて。死体はさ、ナイフとかそういう刃物でめった刺しだったんだって。腑と血が混じり合っはらわたてぐちゃぐちゃな色になってて」

「食事中に話す話じゃないでしょ。まったく、アンタのせいで食欲が減退したじゃない」

零那は残った肉まんを紙袋に戻し、げんなりとした声で言う。

「それはただ、満腹になっただけでしょ」

智恵はしれっとツツコミを入れる。

「ま、それは置いておいて。昨日も家族と話したんだけど、ちよつと戸締まりとか気をつけた方がいいよね。まだ捕まっていけないんでしょ、犯人」

話題を変えようと、すかさず話を紡ぐ。

「・・・？ 本当にアンタ何にも知らないのね」

軽く嘆息し、さらりと智恵は髪を掻き上げる。

「犯人、捕まったのよ。正確に言うと、ずっと死体の側にいたって方が正しいわね」
「へ？　じゃあ、事件解決じゃない。心配して損したあゝ」

「それで終わらないから猟奇殺人事件なんじゃない」

「？　死体が人間の原型を留めていないから、猟奇殺人事件なんじゃないの？」

「それだけじゃ、『猟奇』じゃなくて普通の殺人事件よ。人外なことが起こるからこそ、『猟奇』殺人事件なんじゃない」

「………？　人外なこと？」

「そうよ」

智恵は頷き、声のトーンを少し下げた。

「捕まった犯人ね、何も憶えていないらしいのよ。自分が何をしたのか、何故ここにいるのか、全部ね」

「よくいる『異常者』ってヤツじゃないの？　それかクスリキマってたとか」

「精神鑑定は異常なし。クスリとか、薬物反応はなかったらしいの。もちろん、嘔発見器もやってみたらしいわ。でも結果は全部白」

「………よくそこまで短期間で情報を集めたわね」

「探偵志望をなめなでくれる？」

「あーそうでしたね。平成のホームズ様」

「わたしとしては Doyle より、アガサの作品の方が好きなんだけどね」

智恵は困ったような笑みを浮かべる。

「警察連中はあんまり信用してないんだけど、一種の催眠術による暗示がかかっているような気がするわ。あるキーワードで突然豹変したりするみたいだし」

「催眠術？」

「その顔はアンタもあんまり信用していないみたいね。でも、催眠術は科学的に解明されつつあるものよ」

「まあ、結界や呪言もある世の中だしね」

「何？」

「いや、こつちの話。で、そのキーワードって？」

「そうね……確か『神狩りの牙』だったかな？　いや、『牙を持つ神』かな。どっ

ちでもいいや。まあ、そんなところ。なんか見つかった当初、犯人がずっと呟いていた言葉だったらしんだけど、それを尋ねると態度が豹変するらしいのよ。それを聞いてわたしは催眠術による強制暗示かな、って思ったんだけどね」

「ああそうなの」

絶対コイツは名探偵にはなれない。

論理が飛躍する者に推理ショーなどという高等技術が行えるわけがない。

零那はしみじみとそう思った。

「で、じゃあ誰がその犯人に催眠術かけたのよ？」

「そう。そこなんだけどね」

智恵はぴつと右手の人差し指を立てた。

「わたしとしては多分、人間じゃないと思うのよ」

「!?」

零那は思わず、ずっこけてしまった。

この馬鹿、ついに気が狂ったか。

「その顔は呆れてるわね」

「・・・いや、この場合呆れる以外どんなリアクションをすればいいのよ」

「けれど、恐らく当たらずといえ遠からずだと思っわ」

「ほう。そりや何でまた」

「その犯人に掛けられた暗示ってのが、かなり強力っぽいよ。ちょっとやそつとじゃ解除できないっていうかさ」

「そりやあ、催眠術師でも連れて来なきゃ無理でしょ」

「いや、そうなんだけどさ」

智恵は歯切れの悪い口調で言った。

「わたしが会った感想としては、どうもかなり強力な強制暗示が掛けられている気がするのよね。人外っていうか」

「ちよっ 今、アンタ何って言った!?」

「会った感想としては、って言ったんだけど、何か？」

「なんで、一般人のアンタが犯罪者に会えるのよ!?」

「だから、探偵志望って言ったでしょ？ よく頼まれるのよ。事件解決に協力してくださいってね。こう見えても素人大学生探偵って業界で有名なのよ。何度も事件を解決に導いているから」

「嘘だ・・・絶対嘘だ・・・」

零那は「ごめん、実はもう世界滅んじゃった♡」と笑顔で告げられた時のような驚愕に満ち、かつ、呆れて引きつったような顔で言った。

「意外だった？ 高校からずっと同じクラスで現在先輩のわたしが、巷を騒がせている名探偵だったなんて」

「不本意ながら現在わたしの先輩で、巷を騒がせていないローカルな迷探偵だってことは理解したわ」

「うむ。よろしい」

零那にとつて目一杯の皮肉だったのだが、本人はどうやらまるで気付いていない。

名探偵と迷探偵の発音が同じなんて実に便利だな、などと零那は心の中で静かに思った。

「で、その迷探偵さんと思うに、その人外さんは何でそんなヤツに暗示なんて掛けたと思っ？」

「そんなの分かるわけないわ」

「迷探偵でしょ！」

「探偵は事件を解決して依頼料を貰えばそれでいいのよ。動機なんて精々小説でだけ必要なの。小説家が字数を埋めて出版社のノルマを解決する為にね」

「無茶苦茶なことを・・・」

言いながら、零那は「さっきから迷探偵って言うてんのに何で気づかないんだろ」などと思っっていたりした。

「でも、きつとその『なんかの牙』に恨みがあるのよ」

「RPGでの称号じゃあるまいし、そんな名前の奴いるわけないじゃない」

零那はため息を吐き、紙袋を自分の鞆の中にしまった。
空腹時の非常食とするためである。

「いるのよきつと。そいつ相当悪いヤツなんだと思うわ。もう修正効かないような最悪のキモメンでさ」

「まあ、ネットでのハンドルネームならいそうだけど」

零那はもう吐くため息も尽きたのか、げんなりとした口調で言った。

「でもさ。続くよね、その殺人事件。犯人まだ捕まっていなくてしょ？」

「……多分ね。願わくば、あの刺殺体が『なんとかの牙』だったらいいんだけど」

「……こりゃあ、戸締まりに気をつけた方が良かな」

零那は腕時計を眺めながら、小さく呟く。
時刻は午後五時を廻っていた。

4

わたしは鞆を背負うと、大学の東門から最寄りのＪＲ線の駅へと足を運ぶ。

六月。

日が長くなり始めたばかりなので、五時といえど辺りは薄紫色に染まっている。

わたしは途中、最寄り駅の隣にある行きつけの古本屋へ立ち寄った。

神田の古本屋へ行けば千円で両手一杯に本を買えるらしいが、わたしはそこまで行くな
んてめんどくさいことをしたくはない。

故に、その半分の量の本で我慢しているのだ。

前々から自分のが欲しかったウィリアム・シェークスピアの真夏の夜の夢を手に入れ、
ノリで本棚の片隅にあった埃を被ったサルバドル・ダリの画集を一冊ずつ購入し、本
当はマルセル・ブルーストの失われた時を求めても読みたかったのだが、あの膨大な冊数
に圧倒されて購入するのを躊躇った。今度、暇なときにでも図書館で借りるか、古本屋
を出ると改札に定期券を通し、電車が来るまで読書をして待つことにした。

もう、帰宅時間なのでホームはかなり混雑している。

わたしは少し日に焼けたページをめくり、シェークスピアの世界に浸る。

正直、こういった台本系の本はあまり好きではないのだが、ゲーテのファウストとシェ
イクスピアは別だ。

そういえば、ミヒヤエル・エンデも遺産相続ゲームとかいう劇台本のような本も書いて
いたような気がするが、途中で飽きて読むのを止めてしまった。

やっぱり、エンデはモモが一番いい。

果てしない物語も面白いが、アレはあくまでもありふれたファンタジーの延長線上にあ
る作品だ。

それに比べ、モモの『時間泥棒』という独特の発想の方が数倍面白い。

おっと。

なんでシェイクスピアの本を読んで、ミヒヤエル・エンデの批評なんかしているんだ？
てゆうか、何様のつもりだ？わたし。

小説を一行も書いたことのない人間が、作家の批評なんてやってはいけないのに。

『二番線、電車が参ります。黄色い線の内側にてお待ちください』
ホームのスピーカーからアナウンスが流れ、まもなく電車がホームに到着し、わたしは少し混雑する車内に乗り込んだ。

発車のベルが鳴り、ゆっくりと電車は動き出した。

がらんとしたホームに人影が二つ。

一人は厚手のコートを着込み、山高帽を深々と被り、双眼鏡のような奇妙な眼鏡を掛けた男。

もう一人は、能楽師のような和服に鬼の面を被った男。

供に奇妙な格好をしているが、誰一人それにかまう者はいない。

「どう思う？ 遠眼鏡」とおめがね

鬼の面を被った男が、双眼鏡に問う。

「ああ。『神狩りの牙』に間違いないな。機巧からくり、仕掛は済んだのか？」

遠眼鏡と呼ばれた男は静かに機巧に尋ねる。

「ああ。もう人形は配置済みだ。いつでも動き出せる。今度は先のような失敗はない」

「して、決行日は？」

「六月六日。明日」

「了解」

遠眼鏡は短く呟くと、霧に揉まれるように姿を消す。

それを見届けるや、機巧も遠眼鏡のように同じく、霧に揉まれたように姿を消した。そつ、まるで初めから彼らが存在していなかったかのごとく

「零那、明日のケーキ何にする？」

皿を洗う手を止め、リビングに寝そべってテレビを眺めている零那に向かって詠理が尋ねた。

「んー。チョコレートがいい」

「またか。アンタ、ここ数年ケーキはずっとチョコレートケーキじゃない。たまには別のにしなさい。別に」

「えー。ヤダヤダヤダヤダ」

「小学生か、アンタは」

「いいじゃんさ。人の好みにケチつけることないでしょ。わたしの誕生日だから」

「でも、作るのはわたし。いつも同じメニユーだとつままないのよ」

食器を乾燥機へと入れ、蓋を閉じる。

「んー。じゃーチョコレートケーキの全体にクリームじゃなくて、チョコでコーティングしたやつにしてよ」

「また、めんどくさいことを……。まあいいわ。じゃあ、あとはどんなのがいい？」

「ロースト・ビーフ」
「はいはい。分かりました。まったく、食い意地のはったお姫様の晩餐会は大変だわ」
「じゃあ、わたしも姉ちゃんのお誕生日に料理作ってあげようか？」
「アンタ、わたしを殺したいほど、何か恨みでもあるの？」
「・・・そこまで言うなよ」
零那は半眼で言い、テレビを消して立ち上がる。
「あら、もう行くの？」
「うん。もう寝る」
「珍しいわね。まだ十時よ」
「いやさ、何か眠くて。じゃあ先にお風呂入っちゃうよ」
「どーぞ、ご勝手に」

この家で何よりいいのはこの風呂場の浴槽だ。
何しろ、浴槽で足が伸ばせる。
これが本当にいい。

本当に贅沢な家というのは浴槽が広い家だとわたしは思う。
わたしは大きく伸びをし、湯船に肩までつかる。

多分、ここで普通なら「極楽極楽」とでもたまうのだろうが、残念ながら、わたしにはそんな愛国心はない。

結んだ髪を解き、髪を湯船に浮かばせる。

薄茶色の髪が放射状に四散し、湯に散らばった。

何となく、両手で湯をすくう。

自分の貌が、歪んで湯に映る。

それが、

この歪んだ顔こそが、

自分の本当の貌のように思える。

どうしてだろう。

どうして、一人でいるときこんなこと思うのだろう。

自分が紛い物の人間で、

この人格すらも後付けされたような感覚に何で陥るのだろう。

まるで、何もかも偽物の様に思えてくる。

自分はもちろん。

この世界さえも

・・・これが思春期ってヤツなのかな？

絶対違うと思うけど。

わたしはそんな可愛らしい『普通の』女の子にはなれない。
だってわたしは普通じゃないから。

普通の人間なら、こんな力持っていないから。

ねじ曲がる。

人間の腕も、

人間の体も、

ねじ曲がる。

あつむじゅ。

拍子抜けするぐらい簡単に、

ねじ曲がる。

人を殺した後悔や、

罪の意識も芽生える間もなく、

人が

ねじ切り殺される。

死。

死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死

死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死

死死

理不尽で、

暴力的な、

死。

や
だ
・
・
・
・
・

わたし、まだ死にたくない。

でも、どうして？

どうして、死にたくないの？

歪んだ貌がわたしに尋ねる。

・
・
・
・
さあ？

どうしてだろう。

どうして、死にたくないのだろう。

どうして、死が怖いのだろう。

何故。

それは、

多分。

今を、

こうやって、父がいて、狂暴な姉がいて、イカれた友人がいる今を壊したくないから。

この平穏な日常を崩したくないから。

だから、それがなくなる死が怖い。

普通じゃないからこそ、

異常だからこそ、

わたしは日常を、平穏を切望するんだ。

それはまるで、夜にしか生きられぬ者が太陽を切望するようにないからこそ、ほしい。

手に入らないものだから、手に入れたい。

それが僅かでも手に入れば、それを全力を賭して守り抜く。

それは丁度、暗がりで見えなくなる松明の炎を絶やさぬように努力するのに等しい。でも、それはきっと。

きっと、無駄な努力ってやつなのだろう。

松明の炎は染み込ませた油がなくなれば、消えてしまうものだから

5

「零那」。アンタまた振ったんだって？これで何人目よ」

講義が終わり、大学ノートを教科書を鞆に詰めながら、智恵が言う。

「んー二桁はいつてないと思うけど」

「ったく、わたしにも少しはまわしなさいよ」

軽く嘆息し、智恵は鞆を背負う。

「でもさー。何でアンタ高校時代から一度も誰とも付き合わないのよ。白馬の王子様にも出逢えるとも思ってるわけ？ シンデレラ・コンプレックスってやつ？」

「・・・いや。そんなコンプレックスないし」

「じゃあ何で付き合わないのよ？」

「うーん。どうしてだろう。何でかな。興味が無いってのは違うんだけど・・・」

「あー！さては、もう付き合ってる人がいるのね！ 言いなさい！ どんな人なの？」

もとい、どんな美男子なの？様々な男を振ってきたアンタが付き合ってたんだから、並の人間じゃあないわね！」

「いないわよ。そんなの」

零那は呆れた口調で言う。

「まったく、大和撫子だからっていつても、ちょっとガード硬すぎない？それとも何？神社の巫女は処女じゃないと務まらないわけ？神社の娘なのにマクドナルドでバイトしてる巫女失格のくせに」

「神社の巫女は多分そういうものだと思うけど、マクドナルドは関係ないと思う。絶対。ってか、アンタはさつきからわたしに何をさせたいわけよ？」

「純粋な処女おとめを汚したいの」

「ぶっ殺すわよ」

「いーじゃん。付き合うくらい。手を握るくらい。それこそわたしはホテルに直行しなさいとかいってんじゃないのよ？」

「先ほどそれと似た発言・・・いや、それ以上のことを言った気がするけど？」

「気にしない気にしない。でもさー。せめて想像や妄想の中でも恋愛とかしないわけ？

金髪のカッコイイ美男子と一緒に遊園地行ったり、夜景の見えるラウンジで食事したり、そのあとはドッキドキな体験したり！」

「そりゃ、アンタの趣味でしょ。わたし、金髪には興味ないの。ってか、染めてる男な

んで願い下げだわ。絶対アイツら、四十とか五十になったとき、バーコードよ」

「何もそこまで言わなくても」

「いや、言うわ。ここに断言する。わたしは絶対に金髪の男とは付き合わない！」

「こーいうこという奴に限って、金髪で鋏付き革ジャンのヤンキーっぽいやつと付き合うのよね……」

智恵は軽く嘆息すると、鞆から掌に載るほど小振りの包装された箱を取り出した。

「はい。誕生日プレゼント。今日でしょ？ 零那の誕生日」

そして、その箱をぽんと零那の掌に載せた。

「あ、ありがとう。……何かな？」

顔が弛んでいるのがわかる。

多分、ここが自宅や秘密の場所ならば、はしゃぎまくっているところだろう。

零那は丁寧に包装を解いていく。

解いた包装紙を綺麗に折りたたみ、掛けてあったリボンも綺麗に結ぶ。

包装紙にくるまれていたのは、小さな茶色い木箱だった。

どこかのブランド品なのか、箱の中央にはロゴが入られている。

茶色い小振りの箱を開けると、中には一組の小さな十字架の形を成したシルバーピアスが入っていた。

小さいが、装飾が凝っていて、丁度、クロスしている部分に薄ピンク色の石がはめられている。

「高かったんだからね。大事にしてよ？」

「うん。大事にする！ ありがとう」

零那は箱を閉じると、自分の鞆の小物入れにしまった。

「ちなみに、それ恋愛運アップする効果があるから」

「余計なお世話よ！」

「まーまーいいじゃないの。いつか王子様に巡り会うためにも、持っていて損じゃあないと思うわ」

「だーかーらー。わたしは王子様なんか」

言葉を紡ぎかけた零那の唇に、智恵はそつと人差し指をあてる。

「きつと、いると思うわ。零那のことを本当に理解してくれる人」

「えっ」

いつの間にか二人以外、誰もいなくなった講堂。

いつも見慣れていた場所なのに、今日はどうしてだか別の場所のように思える。

それは、自分の眼前にいる智恵も同じ。

「零那はさ、いつも明るく振る舞ってるけど、肝心なところでは殻に閉じこもってるよ。うな気があるのよね。本当の零那を理解なんて、わたしには多分出来ない。だからさ、それが出来る人にさ、いつか巡り会えたらいいな、って思ってるんだよね。それこそ、男でも女でもどっちでもいいから」

「……どうして、急にそんなことを」

「んー。どうしてだろ？ 何となく、かな」

「……智恵」

智恵は満面の笑みを浮かべ、笑った。

なんだか雲行きが怪しくなっていて、雷がゴロゴロとなっていた。

鳥居をくぐり、本殿の右隣にある自宅へと向かう。

少し重い引き戸をがらりと開け、中に入る。

靴を脱ぎ、リビングへと向かう。

ドアを開け、

「ただいま」

いつも通り、やる気のない挨拶を家族に交わす。

それに笑顔で家族が応える。

応える。

笑顔で。

応える。

笑顔で。

応える。

笑顔で。

死んでいるの？

「な
ん
で？」

事実は思考の対象ではない。

だ
が。

だけど、

どうして?

姉ちゃんが、

父さんが、

どうして、こうもぐちゃぐちゃになってるの？

首が、切断されていた。

右手が、もがれていた。

左手が、千切れていた。

右足が、
なかつた。

左足が、輪切りになっていた。

腹部は、もう、どう表現していいか分からなかった。

何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。

何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。

何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。何故死。

テーブルの上には料理が並べられていた。ちゃんと、ケーキはチョコレートケーキだった。ケーキには誕生日おめでとうって、書いてあった。料理も、まだ温かった。

多分、わたしが帰ってくるタイミングに合わせたんだろう。血に濡れ、潰れたクラッカーが散乱していた。多分、わたしが帰って来たら、一斉に鳴らすつもりだったんだろう。でも。

でも、もう全部壊れてしまった。
歯車が、狂ってしまった。

二度と戻らないくらい、

修理不能に、

ぐちゃちゃに、

めちやくちやに・・・

私の眼前には一人の男

手には刃がボロボロになった大きな鉈が握られていた。

全身、ずぶ濡れ。

真っ赤に、濡れていた。

目は虚ろに虚空を游いでいた。

どんな名探偵も、名刑事もいない。

確実に、こいつが殺したんだ。

家族を。

わたしの家族を

「貴様……」

真つ赤に塗れた顔をわたしに向ける。

「結真の血……『神狩りの牙』……だな？」

どさり、

鈍い音と共に、鉦が地面に置かれる。

背中に背負ったモノを構える。

男の腕ほどの長さの、斧をわたしへと振り下ろす。

「円滑なシステムの運営には貴様は不要」

B級アニメや映画の見せ場のように、スローモーションな動作。

「よって粛正する」

このまま……

このまま、死ねたら楽だよね……？

姉ちゃんと、父さんがいる天国に行けたら、いいよね……？

あ……でも、わたし散々悪いことしてきたから、地獄かな？

でも、姉ちゃんもわたしにイジワルばつかしたから、地獄にいるかもね。

じゃあ、地獄でいいかな……。

ぺたりと、床に膝をつく。

……怖いから、目、瞑ったほうがいいかな。

でも、どうして目は、眼は、閉じてくれないんだろう……？

それどころか、どうして、手は、斧を、掴んでいるんだろう……？

「貴様」

男の顔が、恐怖に歪む。

男の腕が、歪む。

曲がる。

湾曲する。

ねじ曲がる。

斧ごと、

ベキベキ、バキバキ、音を立てながら、

禍る。

「ああああああああああああああああああああ!!」

叫んでいた。

気がついたら、叫んでいた。

どうしてか分からないけど、叫んでいた。

「助け」

ゴキン、

男の首が、ねじ折れた。

それっきり、男は動かなくなる。

わたしも、それっきり動かなくなった。

!!

「どうやら、アタリだったようだな、遠眼鏡」

「そのようだ。これで逢魔^{おうま}に笑われずに済む」

遠眼鏡は、ちらりと視線を下に落とす。

肉塊が三体と、その隣に虚ろな目をした少女が一人

「だが、いいのか機巧？ この少女こそ、『神狩りの牙』なのだろう？」

「然り」

「ならば、今この場で処分した方がいいのではないか？ 生かしておけば、我々齒車集團^{システムズ}の脅威となるのだぞ？」

「それはない」

機巧はきっぱりと断言した。

「もう、こいつは死んでいる。体は生きていても、心が、な。もう、何も出来んよ」

「しかし」

「それに、我々がこれ以上干渉するのは拙い。このミッションでさえ、危険を冒して行っていることを忘れるな。我らが主に気付かれるのは拙い」

『元』我らが主、だ」

「……そうだったな」

機巧は静かに呟く。

仮面に隠れて見えないが、どこか苦笑しているように思えた。

「……皮肉なものだ。人の心を持った人形が、再び人形に戻るとは」

遠眼鏡は少女を軽く一瞥し、呟く。

「……では、人が来る前に消えんとするか」

「そうしよう」

呟き、二人の男は霧に揉まれるように姿を消した。

「……目を覚まして、悪夢はまだ続いていた。

姉ちゃんも、父さんも、

本当に、本当に死んでしまったんだ……」

自分の体がやけに重い。

もう涙は涸れてしまった。

死ぬ気力もない。

あとはただ人形使いからも忘れ去られた人形のようにこの血溜まりで黒ずんだ畳の上に横たわるだけ

本当に人形になれたらどんなに楽だろう。

そうしたら、悲しいとか、怖いとか、そんなものを感じなくてすむのに

雨音がする。

激しい雨音。

台風の時みたいな土砂降りの雨のような雨音。

・・・神様。

本当に神様がいたら、わたしの願い叶えてください。

・・・このまま何もかも洗い流してください・・・

・・・全部。

全部、洗い流してよ・・・

嫌なこと、この体についた血糊も、

全部、忘れさせてよ・・・

今日あったこと、わたしが人間であつた時の記憶を、

お願いだから

「二、土砂降りの誕生日ノ了」
パースデー